

古今著聞集 五 (元禄三年版)

梶山女学園大学デジタルライブラリー

梶山女学園大学図書館

古く考ゆ集

四

平林園藏書



古今著聞集卷第五

秋歌 第六



桂蔭

秋の素盞馬に古風よりとて久く秋の
 の羽伝わり三十二字の兼卷成りて松千万端の
 心結をのが古今此序より成りて人の心成り神と
 しくより川の心とあそそそなりふを海にぬれぬり
 秋明伴信をよそと結りぬる玉鬘るは必貴し給ふ
 善の成れ秋の月ぬれぬれをりて縁起のあつて
 ことこれより貴系のならぬ縁縁天玉鬘る之
 の成とありといまひく縁縁は行を成て言貴

古今卷五

信記とすの教ふうとてよくお示す所を
うせり

和歌入の事

わがの

さへ伯耆^{よその}よまみゆり天正^{てんせい}教感^{きょうかん}わりの勅^{しつ}成

ふじて^{ふじ}詔^{めい}なりうきさりなほよわむ

弘徽^{こうき}皇后^{こうごう}お命^{のみこと}亮^{あきら}かりしうぬゆむりなほ文字

くらう^{くらう}依^よ新^{しん}の白^{しろ}れくまはまはむれ白^{しろ}あふゆせ

舞^まれを^をゆめ^{ゆめ}じり^{じり}かりを^をゆめ^{ゆめ}く^くわ^わゆ^ゆこの^{この}題^{だい}り^りを

四季^{しき}急^{いそ}成^{なり}を^をもら^{もら}お^お舞^まれ^れは^はま^ま 花^{はな}山^{さん}院^{いん}湯^ゆが

はるを^{はるを}ゆめ^{ゆめ}く^く後^{のち}敷^{しき}ゆ^ゆり^りく^くせ^せま^まひ^ひな^なよ^よ未^み成^{なり}が

れ^れき^きふ^ふお^お秘^ひの^のい^いと^と白^{しろ}う^うゆ^ゆり^りを^をゆ^ゆと^とく^くら^らさ^さが

せ^せゆ^ゆの^のく^くま^まに^に西^{せい}院^{いん}ぞ^ぞ種^{たね}多^たり^り惟^{ただ}成^{なり}并^{なら}入^い道^{だう}山^{さん}院^{いん}の

き^きゆ^ゆが^が王^{おう}位^いと^とよ^よく^く西^{せい}院^{いん}の^の種^{たね}あ^ある^るは^はき^きゆ^ゆ乃^の

あ^あら^らわ^われ^れは^はゆ^ゆめ^めの^のま^まひ^ひを^をわ^わら^らせ^せた^たゆ^ゆめ^めを^を

ゆ^ゆめ^めを^をれ^れて^てゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^め

色^{いろ}香^かと^とら^らり^りひ^ひも^もゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^め

ゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^めを^をゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^め

同院^{どういん}湯^ゆよ^よう^うく^くせ^せゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^め

と^とみ^みあ^あら^らり^り十^{じゅう}首^{しゆ}の^の形^{かたち}成^{なり}を^をて^てく^くゆ^ゆめ^めの^のゆ^ゆめ^め

て此らにせ給むるに楊枝よりぬせ給ふ事

あらうくむ楊枝よりぬきみ

昔はふれ給ふ事をりあり

お成者をおぼへしをゆめかのたしほられりしに

此等よ浮面されうよみ給むる

新代もいそりてふりあつて

併よ志をいそりてふりあつて

この程にそ誠よわしゆりてふりあつて

智恵もよそへ千年成りてふりあつて

たうとてふりあつてんゆりてふりあつて

まあ座うふつとせぬゆりてふりあつて

東之東院のまゝを給ふ時七月七日うぐいす孫子あをせ

とよせ給むるに捕内侍おののかりとたふれつて

おまゝこれ女房とわくれりてふりあつて

さこのたふみとてゆりてふりあつて

とそゆめよゆりてふりあつて

かぞへてふりあつて

かそ、このまゝをいそりてふりあつて

いつあつてふりあつて

時のまゝをいそりてふりあつて

らとりきんわそりうれきまがりの
こくきうらわをささ川のとね
らんれやせきそくろをうせぢまそりこと
うくゆききりうみ

代に成てくいろをわくねあてま

多れく免もそむひまのしき

い前木の意盛徳宣すつうまのまはらあれをえ

あくとあがひましくんこひひつるあてたの人

からわたりきあそ志門をさ天れ川

つうりそれみさのやとれは

在れ人

天の川みさのあちくゆきあうれ

いたに志門らんかうたのま

ひわそひいと真わりてこそ傳れ

一系院れは時画曆四年六月八日景力陣十数乃

奇合わりのまよ才十のあまのういふ

わがれまもろりむえかきあう

う門のまののねりそゆき

あひはくあひたり孫あひるる

あもさ免とくはく解りり案り

唐小治るるや 寛平は皇之御出説の時源
景行長安予の長自我と云ふりきり 海河深所耐
わすれ余ふ系極の極位皇の教位位一極皇系約
長某とのせ給るる希代の位皇なるる一自と
おとらじきり

嘉保三年正月晦日夜上人狂思ゆくと云ふき
小舟渡選子より柳の枝と給とせきり人々あはを
足きれといふのやたとてかきこりきり他人の
心成あつたりきり雅通と云く古おれ一自成り
て是より成事りきり人々これ多きなり成りにこれ

紙のあつりきれと成りて成りて書たりきり

教ねつとて成りて成りて下と成りきり

おとらじきり

そ夜の事やあ上人成後へあつりきり成りて
わつらんといふ成りきりきりきりきりきり
打衣と云ふ成りわ由と云く成り成りらてあ上人
小舟をせきりきりて管成はつりきり成りて成り
成りきり成り成りらてあ上人成りなき成り
とて教感と云く大官も成り成り人々後約
成後へ成り成りきり成り成り成り成り成り

名くくろくたあどが何といふぞとあきれた
 り堂しりせあつたる成ゆくと基後かたけり
 くらげとてふ童のむいひく

あのを堂の神く佛くおぼけりか

といふをせしげりくうらまへとせりあしと

わうーみこあそとあぶくりきあ

とのひたり基後あはぬくあしとあそとこの童の
 くだあめあはぬとそいひきあ

或わよ仏半あそは小唐人か人あそとあそと
 又あよ八家の蓮と仲あそ孔あそと権あそとたねよきとあ





古今和歌集

卷三

七文子流つげきりき流城凡くき人此唐人拾遺情
 花思といひを流せ今き人けりうらうをつとそ
 不立有鳥といひきりうらう人その心をとるはわら
 此ころにわんつとねきれが連前うそゆるきりきり
 きてく花流けりくやあらんうそをそめぬをそわ
 べきりわくおのひえそきりりり船くそ六つと杯きり
 天永元年赤宮まゆみきるふ八条を及た后信長
 弁あくとくそ流き流がわりのわりのとそ赤宮ま
 て日集つとつ編つりはるゆき流すくそ一雲ゆるは
 かに物候まそ又集つ年も信あんとそこのわりの流

古今和歌集

九

きりま程よき次の年正月廿三日に病入りて補
て承久三年四月廿八日に奉儀よのり終よき利
保安三年十二月六日奉儀右邊(ついで)終あく執役終り
くよりまへに病が終あへし細のくのがきまら
まよりけりしき

ひりせしわ海下のあつねを
これとみくわのあつね

ゆき

信務の海邊平れく之のくき
うらみかそそあそそ

久壽元年二月十日信室徹福の院(ていしやう)車にくを
の車あより信光(しんこう)の院(いん)奉あへし海(うみ)の邊(へ)と
きより先河(せんが)河(が)危(あや)儀(ぎ)を修(しゆ)せり
入道(いんどう)信(しん)西(せい)河(が)使(し)まへし
くをより權(ごん)儀(ぎ)よ書(か)へさう
府(ふ)小(こ)路(ろ)をせ

わくわく白(しろ)ひをそく
のられまをいけりみる

大御(おほみ)をよ新(あらた)くせき
名(な)ゆくり成(なり)みくり
枝(えだ)ふたえま
内(うち)府(ふ)

あつりくわくしてうらみの花おれん
未だのくしと君の思もまん

大納言

君の代の末もくくうさうくれ
西海いんしとまのわじし

大納言のこゝろはく二首は皆にきりきり
梅花らうれうすはくそふきこ

うらもあられぬのられくくれ
かきりわりのけひあね世のむれ
らとせのほやあしはる

傑之の礼より新院なま後ごはようくせわりは
きりわきの道まぐれをまひしりふかたうら
と然さこれとげらまこれねおやとうか
是くく寐念法師がりくまうははるき
あは法師

あとのあさけきくわうわう
わりあつらうそわあうりき
あし寐念法師

あつりくわくしてうらみの花おれん
未だのくしと君の思もまん

あり法師 法師 花見よ 酒より ぎらに 目と 柳
の後の 女房 ありく みを 柳中よ 法師 ありと あり
昔れ 花見の 法師 ありの 目と 法師 ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと

みる人よ 花見 びりーと ありひ ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと

いかに ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと

平治元年二月十日 ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと

ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと

ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと

君月ひとかり一海よりき侍内の女房れ中より
義人のき侍尉通定とて女房後の女房れ中人
尸おろりき侍

月とれくもあつちあれういひふ

海定左衛門尉のうへへうひまのりくこのりて
りきれどりゆくあひてんやうらうらうりてんあす下
られされた

くらの海をさのりてしをと結

書真の比古角は馬の侍通中おあく侍りきり
作しきえ兼書友の梅をあつちをりてん中交の

ひくくまふくせきく肉付よあぬくせきりゆき
と結とけえと海より流ゆくと作られれんおも
く妻えそのりてりせれんて

久そ可もえあつぬ梅のむあれや

赤通船下のりまえひよりと奉りせれんて
く一階うらうらうらと中おあつちをりてん

あひひきち代もあつちあん

永万元年九月十日又おあつちくは真れされ
とそりてんあつちあつちあつちあつちあつち
おあつちあつちあつちあつちあつちあつち

まれば六時のあまみつひよりほひくお方の合
まきりお方れ曼陀羅と書経しへて七件とお
又三十八人の名字とまわらせり又後無量作衆長
お方の文所読おかれり又紙取あり對唐公長
まきり給ひまきりて件曼陀羅の中寺れ重宝あり
わらうまきりいふありまきりてらり神祇副親仲造官
之晴子息土佐守親祿が中よりまきりてらりまきり
後二十貫ありて買止てまきりお借しへ親身入道中
下は建永元年九月卯宮速之介糸泰向れ時この
曼陀羅取成しひ知しとてまきりて記之あり

嘉永三年十月九日道因法師人々城と老と後社
ゆくお合しを給ふ後社をた官お大御言ありて
しを給ふお合しをまきりて社以月といふと

少りおまきり松抱いこくまきり

じりまきりや社の江此月

わらうらうまきりて社利名後成にとて感しきり
よの人々も得おれりありてらり給ふとてははが代後
紫殿言此社の年貢とまきりて給ふ松橋津入
んとまきりて社利名ありてらり入海せんを給ひ
いづくよりありせん藤人おまきりてお死おれり

討つてかりきり每人わやしとあつたおとこは
 いひとらねたおのこは白面うひていふおとこ
 ゆるさるのまつちやせとひひくせふきり住居
 大の神のはちと威せまをひくお神とわたり
 まひまゆちやうとわあくくおゆるさる
 同式年いふ合れすと廣國大の神海とよりう
 やうせゆるしあふ人田家やうよあふんきりきり
 通國をのりよとまくと入るとおとこひく合れり都
 社乃君海上恥を坐候くそまをゆるぎも後敵に
 別きり坐候のち小二條中納言実綱にたふ赤
 のぞり宰相教長入道よりうひく

修山のちれきくくおつらかり神

りつみ川とくあつたりきり

故に官位に仕れる形勢職をうと合身式人おあそ
 きく沈淪せしれゆらに安元年十月八日越人形よ
 補へ同式年二月十六日参儀小澤一者ふちと島田
 三年八月官位に仕る叙とあつた二年十八日官位
 小將と昔の沈淪の恨もあつたおとこ打つた
 果進せしれらたはあもあつたおとこあつた
 よりかゝる御し同式年正月十六日宰守中納言宰相

古今集

卷之八

ては湯水干ふさのみれ務さるるふまて非徳に
君たりとておとせり今ハつゝふまおつゝつゝ物
ふたれつゝつゝ又年ごちりおれつゝきほ前給
のう成中院合方右府のりとてしやると

八年まてしあどしまうり一様う

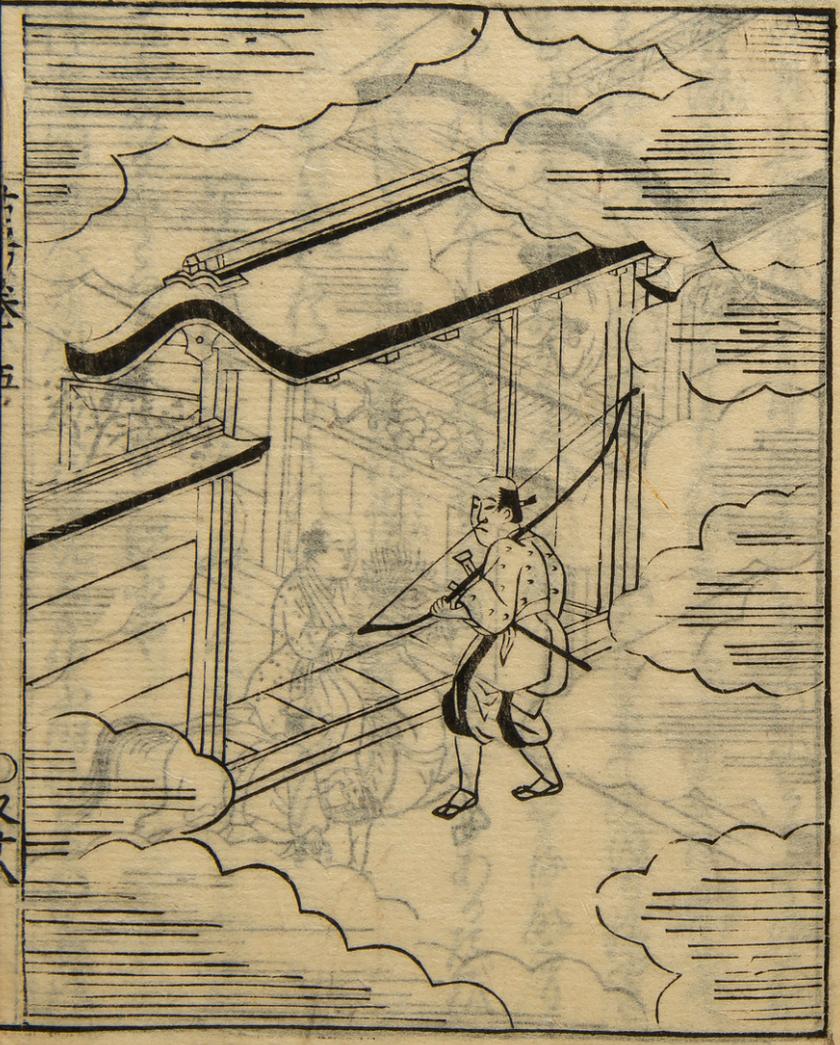
つとみともねいふれきほ

きり

なまそれあま山つゝ様う

又ひさつゝをけりえわりせん

おのまればはたしおれとて行あもも取武年





古今集卷三

三

九月小前奉儀より中納言にたりしれはきりて言渡大納
 言澄^{いさ}出前中納言より大納言ふあしきき侍^{しやく}侍^{しやく}とて
 を後打つてさ昇進^{さうじん}して右大臣までその侍り給さ
 是ハ世も今あがり人^{ひと}才^{さい}徳^{とく}いなりかりき侍^{しやく}あり
 うるれと老しふまれりなれんいふゆはうらあつたひ
 多^{おほ}びぐとじたるこハ二条院^{ふたじょういん}御^ご成^{なり}が侍^{しやく}成^{なり}
 うとて於^おけ^けひし^しれゆと^とかり^{かり}の^のれ^れい
 かりのせせうのみとてき

とりのあつたりにうらつてあや
 市堂園白大井川より控院志長より侍方の御成

古今集

十九

三三

わらうて最は徳の人一戎のせしむべきはよはる大
納言小作れれりしりまのゆれまづとぞや
大納言のくわあれあよれらばとそ人のくまざる
さへいあは

おかしむ嵐の山れらむまれこ

らのおまふあはぬ人そまらぬ

後よいられらるいづまのあうまぶさそと作れ
しぞんわらりせしき一が待の毎にまくと行の
竹茂他とう海一六名をあげく海一と後悔せ
られりはあは山後拾遺集とえらむをまらぬ

紅葉の端とくく入るさうり修るきをゆふ大納
言とゆきまはせしめれたりとのまふて入よきり

源融院大井川道遠れ時之あよの者ありまり

卿民初に強信の又一人は作らるり白河院

西河より書の時信のあは信の之のあとうりてら

るの人ふらうりせせしきをゆふは信の道遠の

るこのあふゆきしとわらりまゆよとわらりまゆた

まりまゆが三事あひらる人よえみまらふひはづさ

てやいづまのあまてしとせらとられらるまゆ

あふらりていづらりまゆくくえんまらふ小連系

三橋ふもつとて中流必司流のほもめされ
あはれ川苗代ありてせとて勢

天のつりゆと神なりハ神

とて先づ成んてくぐりてえ神司してや上りて
まは貴早れ天橋よりりたりてたりのぬゆりて
くれりの橋系とてなづく縁ふありふきり忽り
天宮のななりとて半唐の貞観の帝は隆徳のめり
き橋故事もたてし所より結因のいこれ家とたゆ
あてわりきれて

ねとの二辰とてとてりキとら一かや

秋風をゆく白川の冥

とよあゆとねよ有ありくけあといとさんふ陰屋
やまひく人あてとてきた久くく縁居てふと
くゆく白川のありゆりてのら津奥必れく三橋
折れ流よよふりてそぞ披岸一ゆきる侍賢の院
の女房ふか笑といふあふと有きり

くねてよりとてとてゆは案の

ころかりゆりたりけとせんふ

とてあふ成年流とてゆとる成由流とてゆとる人
あはれらとてとてられらんよよみとてハ集をふ

けりあふらんそとあふらん

さうみたりきねん母とてうらうらとてむすのほ
て下由どの程は七条朱檀のまゝあゝ世の中あふらん
まふお容うらうらうらわさひくゆふうけひとあそむ
て車ふさくくあうてあ方中へ始終のやかりきり
大業一のちと細文わりのきとあや
和泉或うにともこのうれはあきゆはき布祿おぼで
あゆりやうられまあゆん

まのあひくはのわらうとあまうり

わくうれはあうとそとあ

まふありきねん社の内おあつるゆあそて

わくうらあうらうてあつあはははの

あらうらうりのあわりのそ

まあうらあうらうらうら

同或うら女や或う内おあつる世はうらうらうら
かりて人の形をともえあゝね程はあゝあゝうら
まねがうらと或うらうらうらあひわてのあああ
とあああうらうらうらうらああああああああ
あああああああああああ

あああああああああああ

古今集

三十一

新しき花の川に流るる花

さよりのこころをいふはあやういひもれかた井れうか
あひびきうてやわんとおのむら愛あくわす春と
いひくぎりぬれわてうらさきめてよはくきり
てなかり

江奉固如泉此恒よりて後痛きもわりのきり恒若れは
ぬりれうはゆきぬ若深塘大隅をいふ所用
女或嬢女さく

わんといのる命のきりて

さてもつれんとそまうあし

さよみくくたきくははけりもさうのきれのき

の若く白髪は老翁わくくあめ幣とさゆてんく
存のえぬ

色羽は中のみ房小水進ニだえくわあふみまきろが

侍男の流れは方かたの衣きぬ一重ひとへうやくろき感とたひ

少中よありりて糸文いとぶくそてゆりくきろか二日と

いふ小津水おと流うらるるしうをれぬ投形なげかた遠使とほつかこれ

小通おところ夫やあふとさつてまてとやきろ小水進

流ながくやわらわらやあれ中のつじにさうかこれあり今

二日のいと由とてそれよさうけりくをれをうとて

まへと折ひりさうてアをれぬ投形なげかた遠使とほつかも若小水く

のたよりきゆねよ小大を

あひつちやなれんこもあつちのま

あつち人神よなりしむりしと

とよみく^{えき}の^{たけ}極一重ふうとそ^いの^ま室^{あま}あふと^しり
きゆねは^まの^いま^まより^いあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^と
此^まの^まあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^と
それ^いの^まあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^と
の^まあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^と
う^まあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^と
それ^いの^まあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^とあ^ましく^あん^と





舟に馳うや作せられ馳来くるは小大進を
 西の川とて流していきりゆふ小舟の落極よりた
 舟成しておれをたてゑるたれにゆふもつゝぬ
 小舟船友れ南友れありかのをせしる由衣成る
 きたるは法師ゆふの夜徳とて侍賢の流のゆりし
 かりきりあつたるは師子成まのくありしるを
 了そ天林のあつたるありめてを結るるを
 月夜友ううとくゆれお小大進とありきれた
 もんかう成あつたるあよあゆめんやれ
 ばそとて居るに和吉なるおよありめてきりか

宅明石浦の形券り次敷定仰極ありて
多結先付く不系波枚多未元人具よんて
後會と綴りたり

復目於三不乃作大近水周詠水風
免来

和奇一首并序 大寺乃敷光

我朝風俗和奇為本生於志形於言記一
夏詠一物誠為論之端長者若長之美是
以將作大近每属觀天之餘閑淡詞露於
六義叶苦心者花鳥草虫之逸與應士加招

者香秋細馬之羣美今日會遇只是一撥
方今流水當夏考冷風遼考來蓮葉戰以
凄と渚煙漸暗枚標動以冰と沙月初明
情感不盡新而詠吟其詞曰

風やけん浪と秋のしらねん

んんんんんんんんんんんんんんんん

於樹下大更影あり涼水風吹来 和奇

惟理右史歌季

夕はくよむも六川と毛をねん

志契此浦風すりりかりり

古今和歌集

三十一

右馬河原実効うまがはらまこと

ねむりもなれぬ心家風ゆけし

まゝにたれぬ心家ゆけの地

内務以長実うちむらなかつまこと

夕されき河風とくくもれよよ

浪ぞくねも秋やたけらん

右馬河原実効うまがはらまこと

橋かりとあけの河くゆゆく

け夕されき浪さふし川

右近中納雅定うみねなかつまこと

夕海ふれあふかりに風ゆき

わかれ下敷そ浪ふおつゆ

源俊賴げんゆんらう

夕日たれゆきれわみうひさく

あきまゆをけりけしきひ

中務権左輔雅頼なかつむらぎさへつまこと

まゝ死より秋にさるる此川風れ

まゝ死より秋にさるる此川風れ

教経道經きょうけいどうけい

夕にむきふいそれうりの浦にまよ

たりやまどくく夕をそゆく

或うお捕り威ちきり

ふれりや浅き言の風月の夕月よ

原れ山なりや長うさおん

数位かずゐお仲なつ

夕されの夕月とれ川流あそ風の

ま〜とあ〜を秋をよたを海

少納言せうなごん字あや兼あや

若海れ少よりうをのあきとねん

〜と原〜をす〜りせれ

皇后こうごの進者しんしや原はらあそ

わう祿ろくたふの海海れ夕月〜

海うみ〜を秋をよたを海

昔むかし夫婦ふうふわむあひのくほきり男おとこの〜た〜を〜

て〜海うみ〜り〜を〜葉は〜り〜た〜子こ〜た〜ぐ〜と〜思おもれ

おれ山やま〜そ〜る〜海うみ男おとこれり〜た〜ん〜く〜わ〜り〜み〜と〜そ〜

男おとこ〜く〜た〜ぬぬ女め〜を〜子こ〜と〜負お〜て〜ら〜ら〜お〜が〜く〜た〜わ〜る

お化お〜て〜存ぞん〜を〜れり〜其その〜う〜ら〜人ひとの〜子こ〜海うみ〜負お〜て〜半はん〜

海うみ〜と〜〜は〜に〜より〜て〜げ〜山やま〜と〜を〜美み〜と〜名な〜付つ〜を〜名

と〜を〜美み〜石いし〜とい〜る〜り〜り〜六む〜出で〜的てき〜録ろく〜よ〜ん〜と〜り

あつとりののわつりふきくけ非言男れおれじ
之りえんと繋りく遊りたまふとくふあふ
きびあつり

その免世くさく死人はまの山をた

あつりつりあつりつりつりつりつり

家出れ松浦作秋非くいつ大付使も磨る女也
れふふふふの世使も磨るいつりつりつりつり
れ附るつりつりつりつりつりつりつりつり
とつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつりつりつり
松浦の神とて今ふきつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつり

古今集

三十一

かこら成るゆへなるにわりしおをわびぬおき
ひけ成るらとく

おき山新あきやまらるるお山乃井也

わさくの人獲ありまのうは

こまお書おくきしううううおくかりふきしや
屋をくし抱くうりうりあつせり

小野小町うとうくく多城好し附りし御し多福

くぐひかりりきり壮表さうげ元といおゆわら三宮ふ帝は

妃ゆえ漢玉固をれ書もいぬごびたありとあふに

とわさくうらうれがありの御満みえのきとひとまひ

食のく他陸のゆととのえ男よは景祐かみさけ成き

にわらわお成ゆゆしくも川の男さびのゆしくのこ

あひくうあひく一おとこ女中おんな居よん成ゆけけけけねふナセゆけ母

とうしあひ十九あく又おはれアあく見ふまうま

ちとあくおく成きんそく一うるう單いん孤いん無いん親いんのひさり

人おぬそまみびるるるるるるのわくうりはうまう日

おとれねるるるえむやうけりさかしぐくよまきこれた

ん成ゆけぬりくごむひゆううきおとぼけりるおぬおと

月ごうりおくまふるるるわねくよまねれぬおとは

ちけりかくまごぬれぬれ文のり屋のり康やす秀ゆが春河の

古今集

三十三

榎めくろりきほよえんて

つひねれとまほほすれぬとて

さそふあわつらんそそぬゆ

とてそそひまふあちがれりたてんそそわら神あ
ぞさそひまふ人るれまねとれえあはし

和泉或戸保昌が素あて丹後ふよまほ行り系よ
あ合わりとるれ山家内侍あてふあそそそそ

そほを宮敷れ仲御ふたふれよあ或れ内侍り
丹後つらう一保人とそありあてふあていひ入て高

のまう度らそそとる保中或内侍出着うりてあて

いそいそ保一れ神をのふと

保一あつておくみられをばきれ

あつてあつてあつてあつて

とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

うきをねん通房よみをば

わが飯のせはのわあしと聞しんふしを

わ川まのしんしんきさうきり

お房まうしんをぎてやふきり

依是後程を更後細あてしんあし月とのあし成

うきさうに回念よりのがりしを若生中のれきよえ

あれとばくまき得さうひくとおれ部をこそつ

ま川ましんしん

あや元そしやあまのんくわん

うきいそあおお秋のよの月

信あのも成ひらうしんをねんあま感じあつりその

夜これやあおありきり

同人播磨あまりきりあまあまあまあまあまあま

小太文先を義しゆりのが弁よ

我のしんしんしんしんしんしんしん

尾よのねをゆたたりきり

んく感ドあつり良運をあまわりきりあまあまあま

腹つれぬるれしんしん

あまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

ひさえあまあまあまあまあまあまあまあまあま

新とひきねてよめ

あゝいゝわろゝわろゝをえてくれ

新と〜〜ねまのさあろん

びん者びんの三さん瓶びんの海うみはありやわ海うみ人ひとのひらり中なか物もの云
通とお後ごにれあふ世よ多た寺てら河か周しゅう梨り仁に俊しゅんとそ影かげ密みつ智ち
怪あやまてあうとれた人ひとわろゝをりも相あひ後ごふさやうひ
き海うみ女め房ぼう仁に俊しゅんを女めあろろわろりのあゝろゝひびを
ろ海うみりどりきろ成なり河か周しゅう梨り仁に俊しゅんとそ影かげ密みつ智ち
とひく中なか物もの云い春はる籠かご〜〜びんをらすとね〜とそ
わえれも新あたらしくな〜のひ〜き

人〜人のみら後〜河〜も

と後ごとりのをねばああの女め房ぼうあれたる海うみりりそとそ
小こ揚やう杖じょうとりらてに俊しゅんよそ〜とひひ村むら〜海うみ津つよ
そ〜院いんのいおふ事こと〜舞まらひをねたあ〜と
そ〜のそ中なか物もの云いに俊しゅんとめ〜とそ〜とそ
新あたら因いんれわ〜とあるとに海うみ津つよ〜と〜とそ
と〜と〜とねば女め房ぼうがれん院いんよ〜と〜とそ
い〜と〜と思おもて〜と〜と〜と〜と〜と〜と
天あま曆りの月つき次つぎの風かぜは〜と〜と〜と
新あたらと〜と

百人一首

三十七

秋あつとまき井の唐のしきとあり

長ら川ついでとてまわつん

紀時文件多後形をわの何も改かへていつくまう
とんえふ山づた何やとあんと極きあいのあひ熱あつ熱あつ小
あうくうらひらうあまのてのく書之が延祐所何
同屏風よ駒迎の所よ

まねれ雲のく水ふりけんく

いしやひらんを月の駒

と海七は難ありやいつの時文ととく山志うと何文ハ
書之がまわくかくらんそくまを海海くわらひ

左京を史記補新撰小書よりきあは百首よむや
きあひひつあうと作ごとありきれんあうひきり
事らうにわじ十八熱あつ熱あつも熱あつうらひとやきれが海くも百首
あはあひめ文字れかをばよぬさうけりやくとりせ
あひまねん熱捕いつらん百そとよむりあめては
つとらみりやいゆ熱とりきれがさけうよぬおしあ
也と作しとあきれた熱捕うり海川流は百そとよむえ
んるん書文を史記實にあふ海川流は百そとよむ秋風
といふ身一もうらうびくまをれがぬそ改ぬさう紙
小うとて九月十二夜の津舎ふりらてきてさけり

あれは憺としていひたるをねて同じせられぬきりなり
ハハ實れ線なり用きわづらふとや

花園は長あは始くありしつを感得の名流は
うは小松のあふみききりきりやと秋のふと冬は
南あは物くもささりけりくと巻いてあり海は
に書されん下格子よ人まのれと作ききりれ人
女位ありいて人もらぬとては侍あつるに
うははあらしと作ききりれとあつるにはあは
あしよをれはかこゆりては格子ありては
はらとさり張はさくや一着つらうゆりては作され

まばわを中どののとく冬あはゆりては
いさう女房はわらわらとあひたりきりては
うをれは物をはさしてはてはふらうあはと作れ
てきつらうゆりてはわらわら

わとあはれみよりれあはつるあは
夏つらうあはつらうとさうとわらわ

こよみさうをれはあは感一ははつらうあは
ひつてはわらわらとわらわら

寛平お合にの厚紙友則

あはつらうあはつらうわらわら

今そなくねあ秋芳の上

とく免候方ゆくまきり又文字を誦しうき時
有方の人へ急く小きうひろりえ次句小鹿くひは
中ひひま海よこそまときをみりうふされれば
まーる

公任のあめく二月盡の取人と申は久く昔ね
ふま成行ひんのみあみぎり小書結

ふきつるのゆをほりくれし今ほり
あぬるといあり昔のそれね候

大納言ちまうてやまあつと昔を昨日やハあつといたれ

いと心とせめて昔縁松橋ももあつとそはひふきり人
と候りりうをれバ候くありねふ痛の言年比
三月盡よまを成りやハあつと作れり小ふり
ふりやとあ小痛よ候くと候いふもあつと
りれ候くばじりうのやくあ候くと候いふきり
又此自らせみきり大納言あとの不きげうれきり
ハ何う好く難せうきりきりあま

別あ惟方いれの二番虎の印あのとあつと世ふあり
へ々あが何へあつ舞を候まうりて後白河院の
が候りやうりやれハああしてあつありあつり

三十九
をば同くわがされ一人のゆきされれり
おのれうらびうたうはつてあめく

あのみちも三つにけりけり後川

あふれうらもぬりし神り神

きりみくあはへおくれりきり
てはらやうりきんうも飛あつく
小はあふりてはるされれりや

後鳥羽後河内守家朝
がわりうらぬとあひたるに
年と重く言ふされり

又後成ははる後
うりきり

わががの事并り

うらみとらんや

穢事しはあはれ
おとよ作くそは

わが川を雲井と

きおたをれ

原ぞくあまの
壬午二位

壬午二位
八十あくと

夕時七そのあはれみくそ廻めぐ向むかせきさるさるはたの
念ねんふく甚こゝろ志こころひあかきりきりうの七ななはゆよ
全々 三十一
契ちぎはれんあゆみの里さとり座くらりきて

流ながのりりいとたぐもきあうれ

宗家そうけ大納言おほののりとて神かみ系けい備びるあうひて座くらりく
神かみさびいり人ひとかりさあ方かたハ後のち白河しろがわ法はふ堂どう乃すなは女房にようぼう
右みぎ場ばの佐すけと申まをする宗そう院いんは仲なかつおと者ものをどして後のちれ
ぐりりなりてさ成なりづくり結むすき座くらり

あかとのえのられぬえか母ははと

あひかともあしきき座くらり

さしきくやうききりをれが返かへるのりうて車くるまは
つりくびりきりてみきりあふりき座くらりも座くら
さしきり也

座くらりも右みぎ方かた長ながうら海うみうせえハひひさうこりりき座くら
女房にようぼうれもと人ひと柳やなぎ子これくさ成なりはくまらるる宗そう院いんの
柳やなぎとまらるるうとあうれをくせやりんハあはれ書かき
てあひうけねんをあふりてあはれきりきり
さしきり也

あかきねんも柳やなぎなりき也

女房にようぼうハ柳やなぎもハあはれきりてはあはれ求もとむ

されたるのみくまふくしあはくしあをとりり
ての中成あつりせりり

夫ら海身定基んてくまをきふれくまの如お
きれの世成りぬぬれあひ入るきりぬ月れぬれ
かしぬ法くまうくしぬぬれくまうきりぬ
ぬれくまうくしぬぬれくまうきりぬぬれ
ぬれくまうきりぬ

くまあはくしぬぬれくまうきりぬ

くまあはくしぬぬれくまうきりぬ

きりぬぬれくまうきりぬぬれくまうきりぬ

おわらわひきり通んも海身ひくまを海ひひくま
ふれりぬぬれの海身とくま入唐きりぬぬれ
の四通大陣とくまぬぬれ海身山れぬぬれ
つわぬ海身の海身ぬぬれくまきり

既ぬの海身ぬぬれ海身ぬぬれ海身ぬぬれ
ぬぬれ海身の海身ぬぬれ海身ぬぬれ海身ぬぬれ
ぬぬれ海身の海身ぬぬれ海身ぬぬれ海身ぬぬれ
ぬぬれ海身の海身ぬぬれ海身ぬぬれ海身ぬぬれ

ぬぬれ海身の海身ぬぬれ海身ぬぬれ海身ぬぬれ

おねのたより

わあさみーすうこれ池のうけあれん

これあへちりたをしくりらん

とよりきる時おとりて座道りきり申後傍に座
 ぬいさゆりあれをゆくのいみじやあひあて目入
 及右府より新面とぬきつあていけいけはくより出
 ぬくやきーをすそおあへゆーくともきれあ入る
 あへあへさせぬりしとぬいさゆりこれとよりあ
 うとそおねのたよりそとへ室元阿園梨つ区信仰一ゆ
 みーあそそ神をぬれーくともぬらんぬおねのたより

おそねれこれぞあそくゆーやあそりゆきりー
 ぬくそあそくゆきりゆきれとあそりゆきれゆきれ念
 比おのい知結をゆきとあれ 結ひ結きるけんをらゆ
 おりきりゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれ
 申くゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれ
 ぬくあゆきりきりあゆ

あゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれ
 申くゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれ
 ぬくあゆきりきりあゆ
 あゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれ
 申くゆきれあゆきれあゆきれあゆきれあゆきれ
 ぬくあゆきりきりあゆ

四糸あしをそく玉洲の初めおきくもはりその
くま女あしけあふじへしつる田こくあめ
てしうし作るくおねくしとみまは

ゆりみまらふわるとゆりわをたひ

よきこちくねしきのりきり

みくしわあわられいほくはうらこくきほりそきり共
か上進ア高上人あのかくわくえうけられは
二り年おはくわかりきほくあし

河内帝如と山崎帝判者たしりきりそまの年
りのかりきほくが秋よりきりそまのき房をたのいひ

数書成てづうくわくめえんきり

人ばていらりそやまらやあめあふ

これづうひよわれきとほくそ

女あてくきとひきりい人河内よりあてた作めは
おめくあはわうきりいひとてはあめあてそ
まきりあわくそとてまはくみえんきり

あゆめわくあはははくはわとては

人座りあしねらういたうあれ

和泉或アあて揃あしきりお田中の祓のね
て時あれきけらいたいそとてあひきりあ田り

きゆ童のわをとのりの垣うてまへゆのりふきり
下向れ終よとれりされがしあきくしとさるせきり
さて次目或戸もれうさみひうくわたりきり大
やうある童のみりらてきとさみされあれは何者
ぞとていどげゆかまのせうんといひてうさる
とひらちてとてい

時あまゆいかりれお乃とみらとく

わをうりーうりいをたててい

とまうりさり或戸あられとさのくいつとてはひ
わくていひていへきるとあん

字活入道庵ふさうひひゆられりさていさへ一たの
とを浦いけさうせれさるたつさうりされてつ
りをゆ

まれとてゆくとまをれりさ

人りさうふあふもわりされ

へたあさうせぬひくあおるさうさうさくゆ
とてけうりさり

兼安元年三月十九日前大入道法橋の長安
在教院中知宗其尚遠舎成りなり七豊教
位教院に律儀伯教廣王八日長律定成伴病

又通云

老ねとくわくく織方とてあらん

はひとくさうりわとゆらん

又通のうと又教類とて改まきとけきり教類を

とてとくやかたえのうとて改改の

わくもあまひよきゆり部

又通のうと

わくも山いさきうりてとてゆらん

年改ぬ教類を考やとねと

又通補羽長

老らくれめんやとて改改のうと

あやとくさうりわとゆらん

いづれをとくわひとて改改のうと

と補とて改改のうと

改改のうと

らう改改のうと

又とくさうりわとゆらん

改改のうと

ゆてとくさうりわとゆらん

とくさうりわとゆらん

古今考
三十一卷
と考の源流

年次終るまのきりさへかゝるなり

口多き志ぬれさそそりし

前石列別駕祝部成伴

あつたらふしあむの海く入る飛の

あつぬハキハス記やまのん

李朝侍命永花

いふくしあひそまふれされ

いふはうはうはうはうはうは

予為三代之侍讀興七旬之類
世集三區今別七使故有此句矣

衣系指を更源教

いそらあむるまのきりさへ

あつぬハキハス記やまのん

散位大に准光

年少りてみまひあてはるむ

人あみくまらいつはう非

慨下座小ほく人々守家に事お終部下書方件細

政平憲盛光成尹範光照おのくこれあまの

小位てび月在る信は陸信さつりまてこさつりま

の目とつれま

よもひも道もさきふらふら
ゆきそそよよな夜がくち
あさ

おのひやのやま川へあそんせん
付りのこみえーさみう種

ち式下装のちり紙とり白紙を亮密とてうす
と威粉して糸何周梨とらりきぬ

はねのうもつてはあへの
をそれそのゆりこそこれ

あさ

はるのそひうたつらひーれりま
あさわりきりれ麻のそのりも

は信捕物下の仕くる人丸の彩あの信守あ房あの
居ゆくおあれ道紙のえ人丸のうら紙あ
るがふあひりきりあよ人丸あきり紙あ
くうら紙わくをるよーをきりあ房あきり
あして後紙あ信守あ

あさみーまたがらうをねとねとあが
りりきり紙白河院道紙好まの彩を
て徳光の院の信守あさあきり信守

形事は近習あくと而も三々れれはゆかやうりそ
多沢われづらふやてつわふ写しより川形事あつ男
中納言長実の二男春清家傳にの通よこふとて
三男長実の更長傳にふゆつりきり善房外れ正
中ハ中納言長実の長子やうけて出洗じきり長小焼
小きり善房之が自筆此古今とて時おかしく
焼小きりに傍りてこれハ形事あつらふ日本小焼
をゆりてを実ふありまもい通ふとてさんとの
あつてふたつらび写しとてふらび起法文あつと
くや件ハ形事あつとてふらびて家實卿よまづけれ

たり今ハ院小めかられく建者の法より形供を
ゆ中を供具を家衛にたりとてつこりきりそ
あつとて法に供よりてうせてのらそま息れりや
小ききりも院小めかられ小きり長柄柄付橋柱
かく作らるる文基ハ俊急法師が年よりつこりて
後者物事の正附とゆきまづに取られたり二院
序舎ふ及形のあつとて文基あつて和方披編
せつゆかりといと無きとており

其長和武年春聖茂神皇重保又高齒會以う
きり七史成伸宿縁今勝命法師幸俊急法師

七斤思社宜家徳^幸 就盛法師^幸 重保^幸 致神
 二 勝命法師^修 修房^出 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 本^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り
 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り 寺^り

寺

さくられぬ身こそはるせりしらん
あふらぬ心はれしとさぢりん

同はな運りてはるる風ありお合しはるる
形改り長き世のま

あつらひと春小い流しうらまへ
まのいのちを昔のま

さよふをゆる面ゆくまのまたは
物下のりやうつり

さよふと人のまのまのうらまへ
人あつらひとみえり流る

おの階房は多儀素はつとめをゆ
くはなれは又れ物大細を實函又の大細を
りやうらり

わらうれまのまのれらん
あつらひをのまのま

子成りやうられれのみゆつ
名のまのまのま

流るの心は安善のいつくはるれ
風わらうらまのまのま

又於燈臺出大烟其のりもやもろりゆき
 さゆりもろり湯の風もまほ阿とん
 湯ゆりゆりの浦きいゆき
 ち

たうゆこのさみれくらねかりあひ

そのつてあもせりれりーやき

仁和寺法華成徳法華 神也 づくて龍徳の保命

の次より申巡礼一きりあや山吹衣さうの海童

武人おわどとぞこの花をくゆきりい川き

のみりるえんふ是をねこえよのて方漢けい

山吹の花久衣みきりー

舟の秘の秘をのこる

三所くわいひくけくめきし神徳さうめ

おんどて別をーゆき

山吹のそれ久衣わぬこわれん

わそのりく山吹とんさるん

お位と人首よりさうくろのみとれくゆきとあ

ちて二十字ぬおほぐひくいしのしん合とくみつけ

ひかくれまぬとつとてきのた高うけはさ

後成は小判の綱をわせきり又一巻ハ文何合と

古今考

さう枝の香うけよきさう

久一倭成

道野あふもみもまも川代事あれ

と川をさうけよ枝のりや紫れ

又二首をさうく物な海同

契とさうらさうれとりさうさん

わあれうらのほりれをーや火

あのみられさうりやるをわらふも

とらさひをさまもさうのみよ

久一上人

わあれうらさうらさうあはらさう

けささうの わくあくそー

さうりさうのさうーひうけけは

さうひねさうらさうをさうあさ

解脱と人れりやふ信濃といふ傍ありさうい

ーさあせりのあてあんけされさうら入るさう

てわくれさうされさうあむりやさうあ

ふあはらさうありさう

ねもゆーや信濃さみきんさう

そのさうさうらさうをゆーさう

け倍しあはしてありしを面なき知る所ありけり
 うせにきりさけりふしうきありきうはるそ
 名相定たる割箇中なるは五智光院ふゆなるき家
 付種念前右左のませうききりきり二浦十屋
 義連槐原多耐七九ふ八ゆきりゆ新南の後退出
 の耐魁弱の危き人してきり者ふお小ゆくゆとまり
 ころふき次一殺れ出でてふお泉ゆり相傳れふ依
 のゆ成人不行一とれゆゆとゆう一とともふれ魁
 弱ゆあゆりて幸ゆふと適君ゆとゆとふ入依
 けんとはふたふゆゆ人をもゆりゆなきとゆり尺糸

ふ入ふんとてきりてゆとそそのふき次指さるゆれは
 大おまゆりうとりて足まふゆり文書のてて定相
 傳れゆり少くまゆもとれきゆいそゆ偽美
 中とゆづさゆゆ人ふ文よゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 義連ふ祝うゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 たりゆれゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 抄ゆゆゆゆ扇う一首のふゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

るげつりしりきねん新連判らんとく尼おまび
 てざり年号月日由もひと有たおる自筆の書
 下さればお細くやとふとこのごころの尼信
 きりくへと後若人臣家の時件に尼が女ひなの扇の下
 文紙指くゆほふぞくゆりきるん年号月日かた
 きりひひきれんの自筆そのうこれりこあや
 て安あん路どふざり件扇あふ骨ほねとつりい多けんもハ
 細骨ほねあくりんゆきるゆきりくみかゆとて
 くりゆり
 同とおとら山あく樹きれを骨よりらこのきり

かなりの藤成みくまにわ桑江島時政うひをゆ
 きふおゆあんしきる

おゆおれいららうらうらうらあきり
 大おとりをあつた

じざうういづれいれかたじん

わゆあまはつたりやまふ藤成うりて再りきる藤成
 うらりけりりきれきと系うらけけらりら後
 ふぞれくひかたる藤成書あふく

わいまのやかりとらいたわらうた

藤成うけつらうらわらうた

玉師阿院より先く百首成より由せたりし事して
 文内は家傳の長れがへみせおつたされたりをゆが
 わぬり小月出交不思儀はまをたは製安のりせり
 のごちたしきさく人れ録のやうふそてなりて堂表
 物下のりやん懸成あひ小やりたりまねん合巻にて
 藤表の夜中と半付付とて懐問れりてみよとて
 せゆり

林れりろ成たりむつとておまのよなり

あれり一月と物とまされとて

びぬおふとて先く由製れりて成たりとてにたたりとて

おそれと喜ありしとあくの聖院の洞ともわたりけ
 てよみゆり

わるきと一月をゆりそいありおすれ先

ありは製をりすき世なり

減りば由製ハおらとねりの一月もききふひとて
 おくわしつてあそきゆれ製結のようふとわつ時
 あり心おれ事なれりび事なれりまごてとれおとて
 てもえゆらうとねり何なりもせふとたれと事なり
 見えりまきとね道のこも再よとらふおとて
 なしゆ也あ院は由製と昔にとらねりてあそ

由つらそのうしゆめれのちねのりもはらうてせゆ
 神さるはらうて老く百さばうゆせありしゆらりさる
 と大ねを威威のわゆりに密くふぶまうおれゆえ
 見えつらうりきりきり二おは百さくけうしゆの種
 とうりげうてみまをてしれまうふおむくとうらぶ
 ありきりゆく久くをまて海濱のあひくいとれゆ
 わりれお不無休なるゆまうれ故院はゆあにゆきた
 とを強りねとてしゆらうてたやされきりしゆらま
 びげよおさなくつてせ強き海ゆ半しゆてあゆの
 五製さうそめてうたゆくとわくゆめははにいまうね

せうしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 されまうとわなれおまうゆり
 松原傷心行善救病病成大事ありしゆ余治あぶ
 ありきりまうたゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆりまうたゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 きあゆ鬼神ゆき傷心をやや叫やをれはあはれ
 ねがう見しゆまうたゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 けゆ

去月れを瓜うあまうれ此みうの原

川あまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

詠の夢さうり目さく心肝よそみく是の夢
程小差このねそ後病忽やそ例のどくおりつよ
ちりび芳蓮保年九月十二日腹裏の百そ此中會
ふ河の月城家隆いつう海川まるとはは字のおお徳夫
も細更志給あうこそそ不忠候の半人
院の院中六の四時六半の詠候いごう人へり
かりあう成くそ飛れそり定處の飛隆をそと同く
考一そ修よ古あり

まののけきわくみえうとせれより
わうのさなりうさりのみわ

げう成女人甲い書く事せうり甲の程い
由ふ真はよそ沙汰ありきるとぞ
後名相院出時お五指以孝道躬長小出聖聖とつ
らせれ多とせうりあきる時なうそそ院聖と
は物下小あつけしきうりきると程くわゆるをれ
を由院聖ふ付くもありきり

らま成うそよ一やあひ一宮の跡よ
老のあまう此のあひけるう程

明徳院出位の所あるの宮舎をそり他若此名院
かくして前修判あき修するに古寺月くつおと成

物りうゝあひらばるばるうらうら

の海みこひのりてみま

寛治元年二月廿七日西園寺公兼（公兼）あり奉りて
所寄ありては辨（辨）されたりおとくはわくははわ
く物成まゝきほうらうて代帝はは奉りて
せうくせえ

はらうく野の代はは流して

あつたははきみらあひかん

はら

あつたははきみらあひかん

あつたははきみらあひかん

けり昔の天曆の門のまゝにありてありては
時貞（貞）ははのちふりてせたりははきみらあひかん
ははのり物よはは平まゝにありてははきみらあひかん
あつたははきみらあひかん
あつたははきみらあひかん

はら

あつたははきみらあひかん

あつたははきみらあひかん

あつたははきみらあひかん

はら

はら

復に小室をかりし中て律を脱罪せしむるに
大膽なる影造ふりしりきれん若しなり申す
人これ物言ふれぬやめぬかくなりうらなへん
まゝなりきん相なり申す御きり

のさかたはたはらとせもなかりきん

りまれすまのふ人をあわれま

成深傍心なき事候文のじんあてを房中の
たまれし一物もきれん申す法勝常立しり
あやしれりまてりこのとくつねきり法勝
の花は常立件常立法勝いと稱れり申す

どしそりきり候まうた女房に人むんて物きり
がけ法勝をみくわれも人をたれんてまわ
かんじわさきりつるま房は花に候あてひてん
申すつりまれきて法の法勝うちあんで

山か門をりりこそまね様を

さけのまうやあひあつりそ

といひけりしりまれしつらひつる女房に
こそおしわされこそまてりま

入道者大赤真親と仙洞の法にひくむわ
きれ先系ひく一書れあはまきり

物なれそそひくあはわらぬ捨んそく

身成りてそそひくあはわらぬそく

四九

あの一ちれきひそはつらひり下

物あそく人そそひくあはわらぬそく

けいそくそそひくあはわらぬそく

あそくそそひくあはわらぬそく

てあそくそそひくあはわらぬそく

そそひくあはわらぬそく

古今著聞集卷之五終